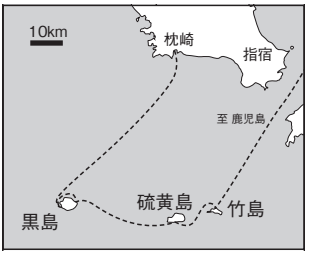
離島留学
里親型

⑤竹島・硫黄島・黒島（鹿児島県三島村）――村内全小・中学校

しおかぜ留学――子どもは家庭で育ち、学校で学び、地域で伸びる

鹿児島県三島村教育委員会　事務局長　児玉　悟



三島村：竹島（面積4.2km²、人口80人：平成28年9月1日現在）、硫黄島（同11.65km²、125人）、黒島（同15.37km²、175人）の3島からなる鹿児島県で最も小さな自治体。大名竹や黒毛和牛などが生産され、ヨットレースやジャンベ教室など独自の島おこしで知られる。

●三島村と学校の状況

三島村は、その名の通り鹿児島県薩摩半島と屋久島のほぼ中間に横たわる竹島・硫黄島・黒島の三島からなる人口四〇〇名足らずの小さな村です。四つの地域には小・中併設校が一校ずつあり、四校で計六〇名（平成二八年九月一日現在）の児童・生徒が学んでいます。島に高校はなく、すべての生徒は中学を卒業すると進学のために親元を離れなければなりません。〝島立ち〟を一五の春に迎えるのです。

ではここで、学校の状況を少し詳しく紹介しましょう。本村には竹島の「竹島小・中学校」、硫黄島の「三島小・中学校」、黒島大里地区の「大里小・中学校」、そして黒島片泊地区の「片泊小・中学校」があります。それぞれ地域の名称が学校名となっていますが、硫黄島だけが「三島」となっているのは、昭和二二年に小・中学校が創設された際、硫黄島以外の学校は硫黄島校の分校または分教場として創立され、その後「硫黄島校」は「三島校」へ、その他の地域の学校は、それぞれの地域を校名として改称または昇格したことによります。

校名がそれぞれ「小・中学校」となっているとおり、三島村のすべての学校は

村内4小学校の3年生から6年生が「冒険ランドいおうじま」に集まり、集団宿泊交流学習を実施。協力してカレーづくりに取り組んだ。

（公財）日本離島センター　季刊『しま』247号（平成28年9月）より

集団宿泊交流学習では学年や学校の垣根を越えて、班が編成される。

今年度、中学生は鹿児島市内の動物病院や水族館など9事業所で職場体験学習を行なった。普段は見ることができない仕事の裏側を知ることができた。

小・中併設校で、複式学級のクラスがほとんどです。授業参観をすると、一つの教室で二つの学年の子どもたちが、背中合わせに仲良く授業を受けている姿が見られます。教室での学習に限らず、学校行事では小学一年生から中学三年生までの二〇名足らずの児童・生徒が一緒に活動するのですから、自然と異なる年齢層に対する心構えが備わります。また、そうならなければ極小規模の小・中併設校の運営は難しいことでしょう。普段から「○○兄さん」「○○姉さん」「□□ちゃん」「□□くん」とごく自然に発せられる姿を見るにつれ、子どもたちに情操教育が行き届いているなと感じます。これは本村の教育において大いに自慢できることの一つです。

●しおかぜ留学制度

減少する人口に伴い子どもたちの数も減り続け、このままでは学校の存続が危惧され始めた平成九年。学校の存続という目的に加え、児童・生徒にとっては三島村ならではの豊かな自然の中で学習することで教育効果が向上し、また三島村の教育全体にあっては、その振興の拡充を図ることを目的に、村内の小・中学校に入学または転学を希望する児童・生徒の受け入れ制度「三島村しおかぜ留学制度」を設立し、留学生の受け入れを始めました。

年間の受け入れ定員は一五名。制度が始まった頃は二五名でしたが、里親の高齢化などに伴い徐々に受け入れ定員が減少しています。

また、当初は小学五年生から中学三年生までの五学年の受け入れでしたが、しばらくすると「小学四年生なのだがぜひ受け入れてほしい」との要望が多く寄せられ、現在で

は小学四年生から中学三年生までを受け入れています。これまでに本村で学んだ児童・生徒は三〇〇人を超えました。

兼業農家の里親の影響からか、将来は三島村で畜産をしたいと農業高校に進学し、卒業後は抱いていた夢のとおり三島村で畜産農家として独立したり、遠路はるばる日帰りで本村の成人式に出席するなど、村を離れてからも機会を見つけては三島村を訪れ、また関わりを持とうとする姿が多く見られます。このことから、里親と過ごした三島村での日々が留学生にとっていかに濃密であったかを窺(うかが)うことができます。

三島村ではお馴染みとなっている西アフリカの伝統打楽器ジャンベを演奏。

●地域としおかぜ留学生

「学校は僻地の暗夜を照らすただ一つの灯りである」――これは、昭和二二年から定年退職となる同四一年まで、じつに一九年にわたり勤務された第二代大里小・中学校長、竹島清章先生が残した言葉です。各地域の人口が六〇名から一二〇名程度の小さな集落しかない本村にあって、学校という存在は、まさに竹島先生のお言葉どおり。そして学校はそこに通う子どもたちあってこそ。「子どもは地域を照らす眩(まばゆ)いばかりの灯りである」とついつなげたくなります。

三島村には、子どもは地域の宝といった意識が根づいています。これは過酷な環境に暮らす人々のコミュニティーにあっては共通の意識ではないかと思われます。そのため、しおかぜ留学生だからとか、地元の子どもだからといった分け隔てはありません。もともと小さなコミュニティーですから、皆が知り合いで、何かあった際は皆で助け合いま

しおかぜ留学生からの声

- 人間の温かみを知った
- 限られた人数の中で自分自身と向き合うことができた
- 身近にいた親の大切さを再確認できた
- 地域の人と接して明るくなれた
- さまざまな体験ができた
- 「学校」というだけで押し潰されそうだった私が毎日学校に行けるようになった
- 地域の方と接する機会が多いため、年齢を問わず話せるようになった
- 親元を離れることや、いままでの友だちと離れるのは辛いけど、その分いままで得られなかった島での生活や学校行事でも小・中学生が協力して頑張れる
- 人数が少ない分、先生に思う存分解らない問題が聞けて理解できるようになった

（公財）日本離島センター　季刊『しま』247 号（平成 28 年 9 月）より

す。過去の留学生に、こんなエピソードがあります。

小学五年生の彼は、朝いつもどおり元気に家を出たものの通学路でアリの行列を見つけました。好奇心の旺盛な小学五年生は、じっと観察をはじめ、ついには学校から里親に「まだ来ていない」との連絡が入ります。里親が通学路で彼を見つけた時、一緒に村民がおりました。畑に行く途中だったが心配だったので彼のアリの観察をそっと見守っていたとのこと。その後、彼は無事に学校に連れていかれました。

なんとものどかな光景です。

●たくましく生きる力を育てる

約二〇年前に本制度が始まった頃の留学生と比べると、留学前の状況について、近年は「不登校だった」「いじめを受けていた」というような留学生が多くなってきたように感じます。また、二〇年前には「三島村の大自然の中でたくましく成長したい」といったような、自分で自分の人生を切り拓いていきたいという前向きな意図を持った留学生がいたのに対し、最近はそういう意気込みを聞くことがありません。これは少し嘆かわしい状況です。

「学びたいのに学べない」――。本村のしおかぜ留学制度は、そういった状況にある児童・生徒に学ぶ歓びを味わわせたいとも考えています。おかげさまで、これまで学校から遠のいていた子どもが、学校に通い、公立高校に進学するといった例は枚挙にいとまがありません。これは、学校はもとより里親にとっても、そしてなにより実親にとって実に嬉しいことです。

片泊小・中と地区合同運動会の様子。地域の方はもちろん、台風被害の復旧工事のため来島していた工事関係者も参加し盛り上がった。

留学生には、人生の中でもっとも充実し美しい輝きを放つこの時期を三島村で過ごしていただき、「自分の人生に真剣に立ち向かう」という気持ちを醸成させてあげたいと考えております。

●留学生も大切な三島村の一員

しおかぜ留学生は、特別な存在でしょうか。いえ、そんなことはありません。縁あって三島村に生活し、それぞれ

の学び舎で学び、それぞれの地域の一員として大切な役割を担っています。地元の子どもも留学生も、どちらも三島村の子どもです。

いつの日か、巣立って行ったしおかぜ留学生の口から、「ぼくの島」「わたしの村」という言葉が自然と聞かれるようになれたら、これに勝る喜びはありません。■

◆里親からみた離島留学◆

私が里親として島外の子どもを受け入れるのも18年目になりました。最初は竹島の子がいなくなってしまい、学校存続のためにしおかぜ留学に取り組んでいました。とはいえ、島出身の子どもがいないのも一時的なもので、数年間でこの制度は終わるだろうと考えていました。しかし、留学制度は好評で、一旦島の学校に通い始めた子どもたちが島に愛着を持ち、長く留学するようになったため、この制度も現在に至るまで続くことになりました。

20年近く里親を続けてきてさまざまなことがありました。1期生として受け入れた女の子は現在32歳。福岡に住んでいて、今でも時々連絡を寄越してきます。また、私の還暦の時にはサプライズで鹿児島市内に住む留学生OBたちが訪ねてきて、お祝いをしてくれました。私は留学生をわが子のように可愛がってきたのですが、みんなも私たち夫婦を親のように思ってくれており、嬉しいものです。

一方で、苦労したこともあります。手に負えず、年度途中で島を離れていった子もいました。実親との連絡はとるようにしていますが、里親として子どもが悪さをした時にどこまで叱っていいのか、時折悩むこともあります。制度が始まった頃は、鹿児島市内からの留学生が多かったため、実親との連携もとりやすかったです。現在は全国各地から留学の申し込みが来るようになったため、場合によっては子どもを預けっぱなしのようになっているのも実情です。

島に学校を残すためには、留学制度を維持する必要があります。里親を長く続けてきましたが、身体がいつまでももつわけではありません。そのため、里親の後継を早くに見つけないといけないと考えています。あるいは、長屋のような合宿型施設を整備して、管理する寮母さんのような人を配置することも考えねばなりません。黒島の片泊では若い移住者夫婦が里親を始めました。このように里親が増えることは喜ばしいことだと思います。

私は現在、6人の子どもの里親になっています。わが子のように育てていかないと、この役目は務まりません。そして6人の誰を贔屓するわけでもなく、叱るにしても、可愛がるにしても同じように接しなければなりません。ひとまず身体がもつ間は、子どもたちのためにも島のためにも続けていきたいと考えています。

（しおかぜ留学生里親連絡会代表　竹島在住　日髙忠一）

児玉　悟（こだま さとる）
昭和32年鹿児島市生まれ。同51年より
三島村役場に勤務。平成28年に三島村
教育委員会事務局長に着任した。

（公財）日本離島センター　季刊『しま』247号（平成28年9月）より